

『宋名臣言行録』―名臣たちの浮沈

國學院大學文学部 准教授 青木洋司

【1】二つの漢文古典 『貞観政要』と『宋名臣言行録』

①『貞観政要』 唐の歴史家、呉兢ごきょうの編。唐の太宗たいそうの言行と、魏徵ぎちよう・房玄齡ぼうげんれいなどのブレーンたちとの問答を記録した書物。徳川家康や明治天皇に愛読されたことが知られる。

・唐の太宗（李世民） 中国史上屈指の名君として知られる。



（台北国立故宮博物院所蔵）

②『宋名臣言行録』 朱子学の大成者として知られる朱熹しゆきの編。宋王朝の創始者である太祖・趙匡胤ちようきよういんを筆頭に、北宋・南宋の皇帝に仕えた諸名臣の言行をまとめた書物。明治天皇に愛読されたことが知られる。

・北宋の太祖（趙匡胤）

（台北国立故宮博物院所蔵）



【2】『貞観政要』に見る「理想的な指導者」

太宗の発言から見る指導者の条件①

君たるの道は、必ず須く先づ百姓を存すべし。若し百姓を損じて以て其の身に奉ぜば、猶ほ脛を割きて以て腹に啖はすがごとし。腹飽きて身斃ふる。…。(君道)

【訳】君主としての道は、必ずせひとも人々をあわれみ、恩恵をほどこさなければならぬ。もし、(重税を取り立てて)人々をむごく苦しめて、君主の身(の贅沢な生活に)あてるのは、ちょうど自分の足の肉を割いて自分の腹に食わすのと同じである。満腹になったときには、自分の身が死んでしまう。……。

宗は、人々を「足」に、君主を「腹」にたとえている。そうして、君主(組織のトップ)と人々(組織の構成者)が一体であることを家臣たちに伝えた。何でも好き勝手できる皇帝という立場でありながら、このような心構えを持っていた。

太宗の発言から見る指導者の条件②

古より帝王、多くは情に任せて喜怒し、喜べば則ち濫りに功無きを賞し、怒れば則ち濫りに罪無きを殺す。是を以て天下の喪亂、此れに由らざるは莫し。朕、今、夙夜、未だ嘗て此れを以て心と為さずんばあらず。…と。

(求諫)

【訳】古来、多くの帝王は、自分の感情のままに喜んだり怒ったりしてきた。喜んでいるときは、やたらに功績のない人間にも褒美を与え、怒っているときはやたらに罪のない人間も殺してしまふ。世の中の乱れというのは、多くの場合、こうした帝王の無責任な行動が原因となる。「だから、」私は、朝早くから夜遅くまで、この問題について注意しないことはなかった。

いったん感情が乱れると、正しい判断が難しくなる。どんな人間でも、自身の感情をコントロールすることは難しい。まずは、この問題を心がけるべきである。

太宗の発言から見る指導者の条件③

太宗、嘗て侍臣に謂ひて曰く、

夫れ銅を以て鏡と為せば、以て衣冠を正すべし。

古を以て鏡と為せば、以て興替を知るべし。

人を以て鏡と為せば、以て得失を明かにすべし。

朕、常に此の三鏡を保ち、以て己が過を防ぐ、…と。（任賢）

【訳】太宗は、あるとき、お側に仕える家臣たちに語った、

銅を鏡とすれば、「姿を映して」衣冠を正すことができる。

昔を鏡とすれば、「歴史によって」世の興亡・衰退を知ることができる。

人を鏡とすれば、「その人を手本として」善悪・当否を知ることができる。

私は、常に、この三つの鏡を持って、自己の過ちを防いでいた、…

【参考】求諫第四

太宗の容姿は威厳があり、極めて厳粛であった。そのため、「太宗の前に」進み出る役人たちは、みな、「その威厳に」圧倒されて動作をしくじってしまうほどだった。太宗は、そのことをよくわかっていたので、役人が自分に意見を言いに来たときは、必ず顔をやわらげて話を聞くようにした。

「三つの鏡」によって何を見るのか

①礼儀正しさ…人前に出るときは、きちんとした（あるいは適切な）服装なのか

②これから先の将来に備えるために、「歴史」（過去）に学ぶ ※「歴史を」ではない

③自分にとって、耳の痛い、言いにくいことを言ってくれる人

礼儀正しさの他…顔色は周りに影響を与える。不機嫌な顔、恐ろしい顔は避ける。人前では、顔をやわらげる努力が必要。それが指導者の務めである。表情・言動には強い影響力がある。

○太和初年（八二七）の出来事

科挙の責任者となった崔郾さいえんは科挙を（都の長安ではなく）洛陽で行うこととなり、高官たちは、みな長安に集まって送別の宴を開催したところ、吳武陵は最後に宴にやつてきた。ごぶりよう

吳武陵はいった、「あなたは、皇帝のために、（科挙を行い、）優れた人材を求めるということなので、役に立つものを差し上げます」と。そして、書を出し、崔郾に渡した。崔郾が読んでみると、それは、杜牧とぼくの「阿房宮の賦」あぼうきゅう ふで表現が巧みで、（客のために朗詠する）吳武陵の声は、また大きく、よく通り、客は驚いた。

吳武陵はいった。「この「阿房宮の賦」の作者である）杜牧は、（今回の科挙を）受験しますので、どうか首席で合格させて下さいますように」と。崔郾は、もう首席は決まっていると答え、第五名（第五位）に至っても、それでも応じなかった。

吳武陵は怒り、「（第五名でも駄目ならば）、『阿房宮の賦』は、お返し下さい」といった。崔郾は、「いや、仰せのとおりにいたしましょう」と承諾し、杜牧は優等で合格した。

※杜牧（八〇三—八五三）…字は牧之。杜甫の「老杜」に対し「小杜」と呼ばれる詩人。

※阿房宮の賦…杜牧の代表作。「嗚呼、六國を滅ぼす者は六國なり、秦に非ざるなり。秦を族する者は秦なり、天下に非ざるなり。」の部分が著名。

①筆記試験の前に合格者、合格順位が決まっている。これは公平な試験だろうか。

②この事例の場合、杜牧は、誰に最も恩義を感じるのか。

【4】『宋名臣言行録』から見る「名臣たちの浮沈」

―宋代の政治家たちは、どのように世を渡ったのか。―

① 北宋の皇帝たち

- (1) 太祖…趙匡胤 ちようきよういん 戦乱の時代。混乱から統一へ
- (2) 太宗…趙匡義（趙匡胤の弟） ちようきようぎ 国作りの完成
- (3) 真宗…澶淵の盟、天書事件 せんえん 前半名君。後半暗君
- (4) 仁宗…慶暦の治 努力家だが
- (5) 英宗…在位四年、濮議 ぼくぎ 薄明の皇帝
- (6) 神宗…王安石変法 改革を目指して
- (7) 哲宗…新法、旧法の対立 混乱期
- (8) 徽宗…北宋の滅亡へ 芸術家皇帝。北に連れ去られる。

② 「太祖誓碑」（石刻遺訓）

ちようきよういん

趙匡胤が即位の三年目に、石に刻んで子孫に伝えた遺言で、北宋の皇帝が即位する際、必ず拝み見るようになっていた。存在は秘密とされ、宰相さえも知らなかった。

北宋と対立していた金軍の侵入し、王宮が占領された際に、その存在が判明した。

○遺訓の内容

- (1) 趙匡胤に皇位を譲った柴氏一族の子孫が罪を犯しても、刑罰に問わない。
- (2) 士大夫および上書（意見を記した文書を提出すること）する者を殺してはいけない。
- (3) これに背く子孫には必ず天罰が下る。

※北宋は、禅譲（有徳者への政権交代）によって成立。

はんちゆうえん

がくようろうのき

③ 范仲淹『岳陽樓記』

「…其必曰、先天下之憂一而憂、後天下之樂一而樂。」

天下の憂ひに先んじて憂ひ、天下の楽しみに後れて楽しむ。

【訳】人々がいまだ憂えない前に憂え、人々が楽しんだ後に楽しむ。

何よりも天下国家の事を先にして自己一身の事は問題にしないということ

【3】曹彬に学ぶ

太祖に仕えた。北宋初期の名将。宋朝建国の元勳の一人。

王と太祖、密かに天下を論じ、事、上意に合せざるなし。公堂の会議なれば、言ふあたはざるがごとし。太祖、益ます器重とする所なり。

曹彬と太祖は、天下の大事をひそかに語りあったが、帝の御心に合致しない場合はなかった。しかし、公式の会議の場では話もできないかと思われるほど無口であり、太祖はますます彼を重視した。

【参考1】

「曹彬は、」功績により、枢密使（軍事関係を統括する官職）を拜命した。「曹彬は」役所にあるときは、いつも公服を着て、きちんと座り、「その態度は」主君や父親に対するようだった。身分の低い役人に接する時も礼をもってして、名を呼ぶようなことはしなかった。

私邸に帰れば、扉を閉じてくつろぎ、五鼓（夜明けを知らす太鼓）がわずかに鳴れば、すでに入朝を皇宮の門で待っていた。雪や霜の日であっても操をかえるようなことはなかった。……。

【参考2】

「曹彬はいった、」「私は將軍となつてから、人を殺すことが多い。しかし、いまだかつて私の喜怒をもつて、たやすく一人として殺したことがない」と。「ある時、」曹彬の家の一部が壊れてしまった。子弟たちは修理したいと願ひ出た。曹彬はいった、「時はまさに大冬。家の壁や軒下には、虫たちが冬眠している。その生をそこなつてはならない」と。曹彬の仁心が物を愛するのはこのようであつた。

（曹彬が）江南を平定した際には、内裏の内郭の門にて謁見した。榜子（天子に謁見する時にささげる書）には、「勅を江南に奉じ、公事を処置して帰国しました」とあつた。曹彬が謙恭（へりくだって、礼儀正しく接すること）であつて、その功績を誇らないのは、このようであつた。

①時と場所をわきまえる。自分の立場の自覚

②自分の頭の下さを吹聴したり、過去の栄光を喧伝してはならない。

【4】 呂端に学ぶ

太宗に仕えた。中国の格言「呂端大事不糊塗」で知られる。賢臣として名高い

趙普 ちようふ ちゆうしよ あ 中書に在り、呂端 りよたん さんせい な 参政と為る。趙 ちよう かつ ひと い、嘗て人に謂ひて曰く、「吾れ常に呂公の事 ことを奏するを觀るに、嘉賞を得ても未だ嘗て喜ばず、抑挫に遇ふも未だ嘗て懼れず。亦 ま そう み かしよう え いま かつ よろこ よくざ あ いま かつ おそ ま げん あら まこと だいほ うつわ た言に形はさず。真に台輔の器なり」。

趙普が宰相の時、呂端が副宰相たつた。趙普は人に語つた、「呂君が陛下に具申するときの態度をみると、（皇帝から）褒められても全く喜ばず、やりこめられても憶せず、また言葉にあらわさない。まことに大臣の器である」と。

【参考1】

太宗が呂端を宰相にしようとした。側近たちは「呂端では仕事が滞ります」と言つて反対した。しかし太宗は、「あいつは雑務は下手だが、大事なことはうまくやる」と、呂端を宰相に任命した。

【参考2】

呂端が高麗に出向いたときのこと。強風のため帆柱が折れ、船中は大騒ぎになった。しかし呂端は平然と本を読んでいた。まるで書齋にでもいるかのように。

【参考3】

呂端は見てくれがよく、懷が深く、重々しい人だった。何度も左遷を経験したが、怨みの色を見せず、そのため世間の評判を集めた。また信頼に足る人間で、物惜しみをせず貧者に施しを与えた。……。宰相としては、物事の本質を重んじ、細事にかまわず、簡單明瞭を心がけた。…。

・人の上に立つ人は他者から見られている。これを自覚すべき

↓【参考1～3】も参照

・相手の望むような感情を示すことは重要だが、時としては、他者への影響を自覚し、感情を示さないことも重要となる。

【5】張詠に学ぶ ―真宗に仕えた名臣。地方官では活躍したが、中央では…

①公こう曰いく、「事ことに臨のぞみて三難さんなんあり。能よく見みること一いつなり。見みて能よく行おこなふこと二になり。行おこなふに当あたりて必かならず果決かけつなること二さんなり」と。

事ことに対処たいしよしてむずかしいことが三つある。第一は、ものをよく見ること、第二は、見て行動こうどうにうつすこと、第三は、行動する時は決してぐずぐずしないことである。

②張忠定公ちようちゆうていこう、蜀しよくを守る。萊公らいこうの大拜たいはいを聞ききて曰いはく、寇準こうじゆんは真しんの宰相さいしやうなり、と。
又また曰いはく、蒼生そうせいに福無ふくからん。門人もんじんの李昉りでん、怪あやしみて之これを問とふ。

曰いはく、人ひと、千言せんげんにして盡つくくさざる者もの、準じゆん、一言いちげんにして盡つくく。然しかれども仕しは太はなだ早はやく、用ようも太はなだ速はやし。學まなぶに及およばざるのみ、と。

張詠ちようじゆんが四川しせんの長官ちやうかんだった時、寇準こうじゆんに宰相さいしやうの大命たいめいがおりたと聞いた。そこで、「張詠は」いった、「寇準は本当の宰相だ。」（また、張詠は）いった、「（彼が宰相では）人々は幸せにはならないだろう」と。門人りでんの李昉りでんは理解できず、その理由をたずねた。

（張詠は）いった、「普通の人間が千言を費やしても足りないことを、寇準は一言で済ませてしまう。しかも仕官した年も若ければ、昇進も驚くほど速かった。勉強する暇がなかった。」…。

①行動すべき時は行動し、後回しにしてはいけない。

②他人に何が足りないのかを見極める目

王陶が次のような話をしてくれた。

りんせん

あんせん

しせん

しんそう

「臨川（江西省）の晏詹がある時、わたしにいった。張詠は四川から戻り、真宗にお目通りして、

じき

四川に兵乱が起こったのは、朝廷の対応に緩急事宜を失するものがあつたためだと言上し、ついでに、

おうたん

王旦は「太平の宰相」にすぎぬとつけ加えた。その時黙って聞いていた真宗は、別の日、私的な居間

おつしや

に詠をお召しになり、王旦はまことに太平の宰相じやと仰言つて軒先をみつめられたまま口をとぎ

され、詠はそのまま退出した。一言の失敗で、大功が全部フイになるとは、さても物を言うことはむずかしい」と。

王旦…真宗が誰よりも頼りとした名臣。 太平宰相…いざという時に役に立たないという皮肉を

とえん

【附】杜衍 — 仁宗に仕えた名臣

門弟の一人が県知事となった時、杜衍は、「君の才能や器量は県知事には惜しい。しかしそれをつつみかくし、かどをたてることをするな。たとえ自分が正しくても相手に合わせ、ほどほどに味方をしておけ。さもなくば、何事もなし得ず、禍をまねくだけだ」と訓戒した。

その男は、「あなたは平生、公明正直、誠実で信頼できることで天下になりひびいておられる。それにいま、私にこのようにおさとしになるのはなぜでしょうか」とたずねた。

杜衍は以下のように答えた。「わしは多くの職務につき、年もとっている。上は天子の思し召しをこうむり、下は多くの人たちから信用されている。だから、自分の思う通りができる。きみはいま県知事になったばかりで、うまくゆく、ゆかぬの鍵は上役に握られている。立派な州知事はそうそうはおらぬもの、もし認めてもらえなければ、君はどうして志をのぼすことができよう。つまりぬ禍をまねくだけだ。だからわしは、君がたとい間違つていてもみなに合わせ、平均値でゆけというのだ」。

杜衍のアドバイスからみる「組織のなかで生きる」とは？

アドバイス

- ① 才能があっても、それを隠し、角を立てるな。
- ② 自分ではなく、相手に合わせよ。
- ③ 成功・失敗は、上役が鍵を握っている。

りようせい ひと あやまち き ようこ
呂蒙正、人の過を記するを喜ばず。初めて參知政事たりて朝堂に入る。

ちようしあ れんない これ ゆびさ い
朝士有り、簾内より之を指して曰はく、「是の小子も亦た參政なるか」と。

もうせい いっわ き な これ す そ どうれつ これ いか そ かんい せいめい きつ
蒙正、佯りて聞かざると為して之を過ぐ。其の同列、之を怒り、其の官位・姓名を詰

せしむ。蒙正、遽かに之を止む。朝を罷むるに、同列、猶ほ平らかなる能はず。窮問

せざるを悔やむ。

もうせい も ひと せいめい し すなわ しゅうしんま わす あた もと し な
蒙正曰はく、「若し一たび姓名を知らば、則ち終身復た忘るる能はず。固より知る無

きに如かざるなり。且つ之を問はざるも何の損ぞや」と。時に皆な其の量に服す。

呂蒙正は人の過失を覚えないようにしていた。副宰相となった時、朝堂の御殿で、ある役人が簾の中から、「あんな小僧まで副宰相か」と指さして言った。

蒙正は聞こえないふりをして通りすぎた。(しかし、)同僚は怒り、その役人の官位や姓名を聞いた。そうとした。蒙正は慌ててこれを止めた。(同僚は)朝の会議が終わっても腹の虫がおさまらず、問いつめなかったことを悔やんでいた。

蒙正はいつた、「もし一度、その名前を聞けば、一生忘れることが出来ないだろう。知らないでいた方がずっとましである。それに聞かないでいても何が損になるのか」と。

当時、人々は全てその度量に感服した。

◎どのように「悪口」「嫉妬」と立ち向かうのか。

他人を矯正することは容易ではない。

他人の問題点を直そうとする気持ちは立派である。

しかし、それは実現するのだろうか。他人を直すことよりも自分を直す方が得だし、危険も少ない。

むすびにかえて ―「人に学ぶ」こと目指して―

◎王安石「勸学文」

北宋の政治家。字は介甫。新法を実施し、政治改革を行った人物。『宋名臣言行録』にも逸話が多く収録されている。

書しよを読よむに費つひえを破やぶらず、書しよを読よめば萬まん倍ばいの利りあり。

書しよは官人かんじんの才さいを顕あらはし、書しよは君子くんしの智ちを添そふ。

(中略)

貧者ひんじやは書しよに困とりて富ふみ、富者ふしやは書しよに困とりて貴とうとし。

愚者ぐしやは書しよを得えて賢けんに、賢者けんじやは書しよに困とりて利りあり。

只ただ書しよを読よみて栄さかゆるを見るみのみ。書しよを読よみて墜おつるを見みず。

(中略)

書しよを読よむ人ひとに勸すすめ奉たてまつる、好書こうしよは心こころに在ありて記きせよ。

【大意】

書物を読むのにお金を使い減らすことはなく、書物を読めば（払ったお金の）万倍の利益がある。

書物は役人の才能をあらわし、君子（のような徳の高い人）の知恵を一段と増すものである。

(中略)

貧乏な人も書物を読むことによって富むことができ、豊かな人も書物を読むことによって高い地位に昇ることができる。

愚かな人も書物を読めば賢くなり、賢い人は書物を読めば利益がある。

ただ、書物を読んで栄える人を見るだけで、書物を読んで失敗墮落する人を見ることはない。

(中略)

書物を読む人にお勧めする。良い書物は読んで、心によく覚えておきなさい。